中央大学論集　第45号　2024年２月

コントとマルクス
――西洋思想史特殊研究――

村　井　久　二

序

オーギュスト・コント及びカール・マルクスは，いずれも19世紀に活躍した人物であったが，その思想が，同時代の人々だけでなく，後の時代の人々にも――しかも，かれらがそこで生きたヨーロッパの人々のみならず，それ以外の地域の人々にも――相当に大きな影響を及ぼした人達であった[1]．特に後者の思想が及ぼした影響には，周知のごとく，極めて甚大なものがあった．

ところで，かれらの思想に関しては，これまで，どちらかといえば，その相異面・対立面に注目されることが多かったとはいえ，容易に看取しうるその「同一性」――即ち，かれらに共通な「人類史は合法則的な発展過程である」とする見地など――についても，語られてこなかったわけではなかった[2]．ところで，筆者が小論で特に明らかにしてみたいと思うのは，これまで余り注目されてこなかったこと，即ち，われわれは，かれらが「法則」として提示していた相異なる二つの「人類の史的な発展」なるものにつき，それらに同一なものとして――但し，相当に抽象的な次元において同一なものとして――「事物のある独特な仕方でなされる発展」を抽出することができる，ということなのである．かくして小論は，かれらの思想のこのような「更なる同一性」を明らかにせんとするものに他ならない[3]．そこで，以下，かれらが「法則的な過程」だとして提示していた「史的諸発展」なるものを多少詳しく見て，それらにおいて，筆者がこのように「事物のある独特な仕方でなされる発展」と呼んでいる変動を，実際に見出してみることにしよう．なお，コントがマルクスよりも二十歳年上だったということ等もあって，以下，前者の議論を後者のそれよりも先に見ることにしたい[4]．

第一節　「人類の史的発展」に関するコントの見解

そこで先ず，コントが「人類の合法則的な史的発展」の総過程だとして提示していた変動をとりあげて，そこにおいてそのような「事物のある独

1）例えば，コントのブラジルへの影響については，三橋利光著『コント思想とベル・エポックのブラジル』，勁草書房，1996年，等を参照されたい．

2）Vgl. K. Popper, Prognose und Prophetie in den Sozialwissenscaften, in: E. Topitch (Herausgeber), Logik der Sozialwissenscaften, siebte Auflage, 1971, S.115.

3）Cf. R. Fletcher, The Crisis of industrial Civilization, London 1974, p.52.

特な仕方でなされる発展」を見出してみることにしよう．ところで，かれにあっては，「知的な（intellectuel）発展」こそが，諸側面からなる人類発展の全体を「導く」ものであって[5]，かかる全体において最も重要な位置を占めるものに他ならなかったし[6]，われわれもそこにおいて，かかる「ある独特な仕方でなされる発展」を極めて明瞭に見出すことができるのである．そこで，以下，もっぱらかれの「知的発展」の総過程についての議論を見て，そこからそのような「発展」を抽出してみることにしたい．

さて，コントによれば，人間知性にあってその二側面をなす「観察」と「理論」とは，相互補完的なものであった．即ち，理論をつくりあげるためには最低何がしかの観察が必要であり，逆に「一貫した観察を効果的に遂行するためには」,「現実的であろうと空想的であろうと，漠然としていようと正確であろうと」,「まず何らかの理論が必要」なのであった[7]．そして，かれによれば，観察の発達は理論の発達をもたらし，逆に，理論の発達は観察の発達をもたらしてきたのであって，知的発展の過程というのは，観察と理論とが，このように「循環」しあいながら，発展してきた過程に他ならなかったのであった[8]．なお，かれによれば，「観察」それ自身は，「順次蓄積されて行く」という仕方で発達するものであり，また，そのような仕方でしか発達しえないものだったのであった．

ところで，人間達が最初に十分な観察を行った

4） コントは1798年生まれで，マルクスは1818年生まれの人であった．なお，F．A.ハイエクは，その諸著作の一つのなかで，「マルクスとエンゲルスの有名な歴史理論は」,「その言葉遣いは主としてヘーゲル主義的であるが，通常理解されている以上に，はるかに多くのものをサン・シモンやコントに負っている，と私は信じている」（F. A. Hayek, The Counter-Revolution of Science, LibertyPress Indianapolis, Second edition 1979, p.395）と述べていた．つまりハイエクは,「コントの歴史論」は,「マルクスがその歴史論を形成するうえで，一定の重要な影響を及ぼした」と考えていたわけであるが，筆者もその可能性は十分にあると考える．とはいえ，そのことを示す端的な事実といったものは存在しないのであって，かかる「影響」というのは，あくまでも推測されることにとどまるのである．そこで筆者は，この件に関しては参考までに，マルクスがその歴史理論を形成・発展させていた時期の「備忘録」――『1844年から1847年にかけての備忘録』――には，≪*Auguste Comte* Phil. pos.≫という記述が見出される，ということを述べておくことにしたい．Vgl. K. Marx, Notizbuch aus den Jahren 1844-1847, in: Marx/Engels Gesamtausgabe, Akademie Verlag, Berlin 1998, Ⅳ/3, S.17. 但し，マルクスがこの時期にコントのこの著――即ち≪Cours de philosophie positive≫――を実際に読んだのか否かは，かれによるそれからの抜粋やその評注が残されているわけではないために，分からないのであるが．

5） コントによれば，「知的な」側面は，史的に変化していく人々の社会的生活全体のなかで，「嚮導的な部分（guide）」をなすもの――最初に変化して,「物質的な」側面のそれに対応した変化を惹き起こしていくもの――だったのであった．そしてかれはこのことを，「人類発達の全体が成就したのは，常に，知性の指揮（direction）の下においてだった」とも表現していたのであった．Cf. Auguste Comte, Cours de philosophie positive, in: Œuvres d'Auguste Comte, Editions Anthropos［以下，Comte, Cours, Œuvresと略記］, tome 4, p.519.

6） とはいえ，より詳しく見てみれば，「知的な」側面と「物質的な」側面にあっては，後者も，前者から影響を受けて発達した後で，前者に新たな発達――その言わば補足的な発達――をもたらしてきたのであった．また，「物質的な」側面は，僅かにではあるが，「知的な」側面から独立した発達も遂げるものだったのであった．かくしてコントによれば，「知的な要素」というのは，より正確に言えば，人が「他の要素の発展を捨象してみても」,「その発展を最も良く考えうる要素」であって，かつ，「その最初の変化衝動を他の要素に伝えて」，他の要素の変化を惹き起こしてきたそれ，と言いうるものに他ならなかったのであった．Cf. ibid., p.517.

7） Cf. ibid., pp.531-533.

8） なお，かれによれば，「最良の理論というのは，常に，それぞれの時代において，その時代の観察の全体を最も良く表しているもの」のことに他ならなかった．Comte, Cours, Œuvres, tome 6, p.673.

のは，かれら自身の行動であった．かくして，最初に成立した十分な観察によって裏づけられた「理論」――したがって「実証的」と呼びうるような理論――というのは，あれこれの意欲によってあれこれの行為が惹き起こされるという，人間行動についての諸理論であり，諸法則だったのであった．即ち，歴史的には先ず，「個人的あるいは社会的行動に固有な第一の自然諸法則が，自然発生的に生まれた」[9]のである．そして人間達は更に，諸現象を「できる限りかれ自身の諸行為と同一視する」というその「原初の傾向」にしたがって[10]，この「個人的あるいは社会的行動に固有な第一の自然諸法則」を「外界」の諸現象に「移し替えてみた（transporter）」――今日のわれわれから見れば，「擬制的に（fictivement）」[11]そうしてみた――のであった．言い換えれば，かれらは，「外界」のあれこれの現象はあれこれの意欲によって惹き起こされている――そして更には，「外界」の諸現象は全てそのようにして生じている――という，「基本的に想像に立脚する」諸理論をつくりあげたのであった．さて，コントは，このような「外界」の諸現象を諸意欲から説明せんとする理論を「神学的な」それと呼ぶのであるが，それはかれによれば，当時の発達段階における観察に対応して，「不可避的に」成立したものに他ならなかった[12]．そして，人間達はかかる「神学的諸理論」の下で，「外界」の諸現象を以前に比べてより周到に観察するようになったのであった．更にかれらは，かかる「外界」の諸事象に関する「神学的な観念」の基礎上で，「世界の全ての事象についての統一的な観念」・「世界観」を打ち立てんとするに至り，そしてそれを実際に打ち立てたのであった．即ち，「全ての事象は神的意志によって生じている」という「神学的な」「世界観」――あるいは「神学的な」「哲学」[13]――が樹立されたのであった．かかる「神学的世界観」は，「万物の根本的な説明方法」を提出することによって，知性を大いに活気づけ，かくして観察の大きな発展をもたらすものに他ならなかった[14]．

さて，かかる「神学的諸理論」とそれらに基礎を置く「神学的世界観」の最初の形態というのは，あれこれの個物にはあれこれの「神性」・「恣意的な意志」が宿っているという「フェティシズム」の諸理論であり，また，それらに基礎を置く，「どの物にもそれ特有の神性・恣意的な意志が宿っている」という「フェティシズム」の世界観であった[15]．かかる「フェティシズム」の諸理論と世界観の下で，外界のより注意深い「観察」がなされて行ったのであった．ところで，コントによれば，「観察」がこのように成長して行く過程というのは，「様々な観察諸結果の一般化が，少しずつ進行して行く」[16]過程でもあった．即ち，「一群の諸個別事物は同じように変化する」といった，「諸種の事象の一般性」――その「一般的な」側面――の知識も成長して行ったのであった[17]．しかし，それとともに，かかる「フェティシズム」の理論や世界観は，このような「一般性の知識」

9） Comte, Cours, Œuvres, tome 4, p.555.
10） Cf. ibid., p.527, p.529.
11） Cf. ibid., p.555.
12） Cf. Comte, Appendice Général du Système de Politique Positive, in: Œuvres d'Auguste Comte［以下，Comte, Appendice, Œuvresと略記］, tome 10, p.92.
13） コントにおける「哲学」の語義については，Comte, Cours, Œuvres, tome 1, p.xivなどを参照されたい．
14） Cf. Comte, Cours, Œuvres, tome 4, p.534.
15） Comte, Traité Philosophique d'Astronomie Populaire, in: Œuvres d'Auguste Comte［以下，Comte, Traité, Œuvresと略記］, tome 11, p.3.
16） Comte, Cours, Œuvres, tome 5, p.80.

と次第に不調和なものとなっていき，したがって，そのような知識――「現実的（réel）知識」[18]――に対してより調和的であるような，新たな理論・世界観と交代せざるをえなくなって行ったのであった．なお，知性のこの発達段階にあっては，外界の諸事象が，単にあれこれの「一般性」を有するだけでなく，それを超えて，「不変の自然諸法則にしたがっている」という認識は，限られた僅かな諸事象――しかも重要でない二次的な諸事象――について成り立っているものにすぎなかった[19]．とはいえ，そのような僅かな諸事象は「自然法則にしたがう」と看做されていたのだから，「神学的世界観」の体制というのは，その下に，「神学的諸理論」のみならず，若干の「実証的理論」も存在しているような，多少の「不整合性」を含んだ体制に他ならなかったのであった．

さて，かかる新たな理論・世界観との交代は，膨大な数の「神性」が，一群の類似した諸個別事物についてはそれらを一括して支配しているような「多数の神々」へと縮減される，という仕方でなし遂げられた[20]．かくして「フェティシズム」の理論や世界観に替わって，「多神教」のそれらが登場することになったのであった．コントの言い方によれば，「個体の思想に対して，種の思想が優位した」[21]のである．ところで，この交代過程をより詳しく見てみれば，膨大な数の「神性」は諸個別事物から撤退するに当たって，それらのうちに，「己の代わりに，一つの神秘的実体を残した（laisser, à sa place, une mystérieuse entité）」[22]のであった．そして，縮減の結果たる「多数の神々」の各々は，主要には，類似した一群の諸個別事物から離れた所にあって，それらの諸事物を，かかる「ある実体」――「人格化された抽象」――を通じて間接的に支配する，とされたのであった．なお，諸事象が「不変の自然法則にしたがうものである」ということは，知性のこの発達段階においては，これまでに比べてより多数の事象について認識されるに至ったとはいえ，それらの事象はなお僅かであり，しかも大部分は重要性が低いものにすぎなかった．

なお，個々の事物に個々に「神性」が宿るという「フェティシズム」の理論と世界観は，かかる性質の基礎上で，一定の発展を遂げるものだったのであるが，コントによれば，それはその結果，「星辰崇拝」という，その最高形態・最終形態に到達したのであった．ところで，この「星辰崇拝」は，もしそれがなければ，「人間知性」にとっては「実行不可能な」「一挙になされる大変革」とならざるをえなかったであろう「フェティシズム」から「多神教」への移行を，漸進的になされるが故に，それにとって「現実的に実行可能なもの」たらしめたのであった[23]．

さて，「多神教」の理論や世界観の下で，「観察」は一層発達し，諸種の事象の一般的側面の知識――特に「外界の安定性や規則性」[24]の知識――も一層成長して行った．しかし，それとともに，かつて「フェティシズム」がそうなったと同

17） なお，コントによれば，「極めて単純な諸現象」については，早い時代から，その「二次的規則性」（Comte, Traité, Œuvres, tome 11, p.18）が知られていたのであった．

18） Ibid., p.36.

19） コントによれば，「アダム・スミスも言っている」ように，「最も単純で最も規則的な若干の現象は，何時でも自然法則にしたがうものと考えられてきた 」（Comte, Appendice, Œuvres, tome 10, p.139. Cf. do., Cours, Œuvres, tome 4, p.554）のであった．

20）「諸現象の諸関係がより大なる一般性を獲得するにつれて」，「超自然の作用者の数は減少した」（Comte, Appendice, Œuvres, tome 10, p.139）のであった．

21） Comte, Cours, Œuvres, tome 5, p.81.

22） Comte, Cours, Œuvres, tome 4, p.562.

じように，「多神教」もまた，やがてはそのような更なる成長を遂げた「現実的な知識」に対して不適合なものとなり，それにより適合的な新たな「理論」や「世界観」と交代せねばならなくなって行ったのであった．かくして,「神々」の信仰は，かかる一層成長した「現実的な知識」に適合的な――そして，それによって準備された――「全世界を支配する」「ただ一つの神」の信仰へと変更されて，「多神教」の理論や世界観は「一神教」のそれらに取って代わられることになったのであった．コントによれば，第二の「一般化」――「新たな一般化」[25]――がなし遂げられたのである[26]．

さて,「一神教」の「理論」や「世界観」にあっては，諸種の事象の「安定性や規則性」の知識が相当に発達していることに対応して，「神」がその「気紛れな意志」を直接に発動する機会は大幅に減らされた．また「多神教」において出現した，「神々」が自己の「身代わり」として諸個別事物に残置した抽象的な「実体」という観念は，「一神教」の下で，大きな発展を遂げた．

なお，「多神教」も，「多神」という性質の基礎上で，一定の発展を遂げるものだったのであるが，その最終形態たる「最強の運命神」崇拝もまた，もしそれがなければ「人間知性」にとって「実行不可能な」「一挙になされる大変革」とならざるをえなかったであろう「多神教」の「一神教」への移行を，漸進的になされるが故に，それにとって「現実的に実行可能なもの」たらしめたのであった[27]．

さて，「観察」は，「一神教的な諸理論」と「一神教的な世界観」の下で，更なる大きな発達を遂げた．そして，それとともに，諸種の事象の「単なる規則性」等の知識だけではなく，それらの「実証的諸法則」の知識も，大きな成長を遂げて行った[28]．しかし，かかる過程は，「一神教的世界観」の土台をなす「一神教的諸理論」が，「実証的諸理論」によって益々蚕食されていって，「一神教的世界観」が益々「空洞化」していく過程に他ならなかった．したがって，それは，世界観としての「一神教」の地位が次第に「揺らいで行く」過程――それが次第に「不安定なもの」となって行く過程――だったのであった．とはいえ，「観察」と「実証的諸理論」の発達はまだまだ不十分であって，それは未だ,「一神教」という世界観にかえて，「実証的な世界観」を樹立しうるほどの発達程度には，達していなかった．

その時,「神」が個別事物から撤退するに当たって，自己の「身代わり」として残置したものであって，これまで「神々」更には「唯一神」の言わば「僕」たるものにすぎなかった「実体」が「主」

23） Cf. Comte, Cours, Œuvres, tome 5, p.84. コントによれば，「フェティシズム」から「多神教」へ中間項無しに移行するのは，「人間の知性」にとっては飛躍がありすぎて無理なことだったのであるが，「星辰崇拝」という中間的「過渡的段階」を経てならば，それは無理ではなく，可能なことだったのである．「人間の知性」というのは，かれにあっては,「急激で乱暴な（brusque）変化とは相容れない」（Comte, Cours, Œuvres, tome 4, 562）ものに他ならなかった．

24） Comte, Cours, Œuvres, tome 5, p.222.

25） Ibid.

26）「多神教的理論」は，観察の成長をもたらしながらも，やがてかかる観察の結果たる「世界の基本的調和」という「感覚（sentiment）」（Cf. Comte, Traité, Œuvres, tome 11, p.18）に対して不適合なものとなってしまったのであった．コントによれば，「多神教」における「気まぐれな神々の無秩序な大群が，人間知性に示さざるをえなかった直接的で全般的な矛盾」は，やがて，「世界の基本的調和」を感じるようになった「十分に育成された人間知性」において，その「憤慨を惹き起こす」（Comte, Cours, Œuvres, tome 5, p.222）ことになるものだったのであった．

27） Cf. ibid., p.224.

28） Cf. ibid., p.378.

に成り上がらんとし始めた．即ち，「実体」観念の形成・発展を推し進めるとともに，その結果でもある「形而上学的な精神」が，この機に乗じて，「一神教的理論・世界観」を破壊して，そのなかに従属的に含まれていた「実体」観念・「形而上学的理論」を自立させ，それを一層発展させんとし始めたのであった．そして，それは更に，「特殊的な諸実体を本性的自然（la nature）というただ一つの一般的実体に従属させて」，万物は畢竟かかる「本性的自然」によって統治されている，と主張し始めたのであった[29]．かかる「形而上学的理論・世界観」の樹立は，「観察」と「実証的な諸理論」の成長――更には，それらの未曾有の大成長――を，もたらすものに他ならなかった[30]．

しかしながら，コントによれば，このような，「形而上学的な精神」による「一神教的理論・世界観」の破壊と「形而上学的理論・世界観」の樹立の試みは，「危機」を招くもの・「危機の時代」を到来させるものでもあった．

さて，かれにあっては，総じて「知的な秩序を確保しつつ」，「知の更なる進歩をもたらす」ような「精神」こそが，「真に適正な」それだったのであった[31]．だが，「形而上学的精神」というのは，かれによれば，本質的には「議論する（argumenter）ことへの執拗な傾斜」によって特徴づけられる「批判的検討の精神」であって，「観察」――そして「実証的な諸理論」――の成長・大成長をもたらしながらも，知的秩序が依拠すべき「権威ある至高観念」を次々と打ち壊して，結局「普遍的懐疑」や「果てしない論争」を，即ち「知的アナーキー」を生み出してしまうものに他ならなかったのであった[32]．

そして，「形而上学的精神」は，それ故にまた，「一神教的理論・哲学」の破壊を試みるとはいえ，それを破壊し尽くすことはできず，やがてはその復活を招くものに他ならなかった．即ち，その破壊が一定程度進行して，「知的アナーキー」が蔓延してくると，やがて，知的「秩序」の必要性が，「形而上学的理論・哲学」の否定＝破壊，そして「一神教的理論・哲学の復位」という形で，自己を貫くのである．とはいえ，「一神教的理論・哲学」が樹立する「知的秩序」は，「知的進歩」と両立しえない「旧秩序」にすぎないから，それは再び「形而上学的精神」によって「否定＝破壊」され

29） Cf. Comte, Traité, Œuvres, tome 11, pp.9-10.

30）「形而上学的な」「実体」というのは，一方の極では「超自然の力・神意の発現」に接続するとはいえ，他方の極では諸事象の単なる「抽象名称」に接続するような，「曖昧で不明確な（équivoque）」（Ibid., p.9）性格のもの――あるいは「雑種的で流動的な（batârd et mobile）」（Comte, Cours, Œuvres, tome 4, p.562）性格のもの――だったのであった．そして，「形而上学的理論」というのは，その「実体」観念のこのような性質のお蔭で，かなりの程度まで，観察の成長と調和的たりうるものだったのであり，「神学的理論」に比べて「実証的概念の発展をより助けうる」ものに他ならなかったのであった．Cf. Comte, Traité, Œuvres, tome 11, p.8.そして，それは実際に，観察と「実証的諸理論」の成長・大成長をもたらしたのであった．

31） コントによれば，「実証精神」というのは，「存在の観念と運動の観念の調和」を確立し，更に，「秩序の観念と進歩の観念の絶えざる連帯」を樹立するものだったのであった．Cf. ibid., p.56.

32） Cf. ibid., pp.9-11.かくして，「形而上学的精神」というのは，コントによれば，もはや知的「進歩」を促しえなくなった既存の古い知的「秩序」を破壊することはできても，結局，新たな知的「秩序」を樹立することはできないもの，その意味で「建設＝組織」能力――「ポジティブな」能力――を欠いているものに他ならなかった．したがって，それはつまるところ単なる「否定的な進歩の器官」たるにすぎないものだったのである．かくして，それは，コントによれば，「ネガティビズム」（Comte, Système de Politique Positive, in: Œuvres d'Auguste Comte［以下，Comte, Système, Œuvresと略記］, tome 8, p.xvi）と呼びうるものに他ならなかったのであった．

ねばならないし，やがて実際に破壊される．そして，かかることが繰り返されて，「形而上学的理論・哲学」と「一神教的理論・哲学」とが，支配的地位を交互に取りかえあうのである．これはまさに「危機の時代」の到来に他ならない．「観察」と「実証的理論」が相当に成長していて，既存の「一神教的哲学」がその更なる成長に対して相当に不適合になっているとはいえ，前者が未だ,「知的な秩序を確保しつつ，知を進歩させうる」「実証哲学」を樹立しうるほど十分には成長しえていないという状況で，したがって，「秩序と進歩」という二要件を同時に満たしうるような「真に適正な精神」の言わば「空位期（interrègne）」[33]において,「進歩」をもたらすとはいえ，結局「知的アナーキーに行き着くような進歩」しかもたらしえない「形而上学的理論･哲学」と,「知的秩序」を樹立するとはいえ,「進歩と敵対的な旧秩序」しか樹立しえない「一神教的理論･哲学」とが,「悪循環的に」交代することになったのである．

だが，人間知の基本をなす観察は，このような「嘆かわしい悪循環」[34]という状況にあっても，着実に成長を遂げて行ったのであり，また，それに対応して「実証的諸理論」も更なる成長を遂げて行ったのであった．そして,「実証的諸理論」がこのように更なる成長を遂げて行くとともに，やがてそれを基礎として,「実証的世界観」が成立したのであった．即ち,「実証的精神」は，先ずもって，外界の基本的諸法則を確立した後で，人類それ自身の探求に向かい，そして，外界の基本的諸法則の基礎上に，人類自身の基本的諸法則を樹立したのであった．言い換えれば，まず「自然哲学」が「実証的」となり，次いで「社会哲学」も「実証的」となって，知全体が「人類」という「権威ある至上観念」の下に体系化されるに至ったのであった[35]．そして，大発展を遂げた「実証的精神」は，更に，人は「思考の対象を真に解決可能な研究に限定すべきだ」[36]として,「神意」や「実体」といった「究極原因」の探求･「絶対的知識」探求の「体系的な忌避」をも宣言するに至ったのであった．かくして,「一神教理論･哲学」や「形而上学的理論・哲学」は信を失って行き，そして，それら自身も，自己を維持せんとする欲求や力を失って行ったのであった．そして最後には,「知的な秩序」を維持しつつ「知的な進歩」をもたらしうる「実証哲学」の体制が樹立されたのであって，その下で「観察＝実証的諸理論」は更なる成長を遂げて行ったのであった．なお,「実証的精神」は，その「肯定的な（positif）」性格に照応して，衰退していく「一神教的哲学」や「形而上学的哲学」を,「力ずくで廃止する」･「否定する（nier）」のでなく，それらをして「自然に消え失せるに任せた」のであった[37]．

さてコントによれば,「一神教的理論・世界観」から「実証的理論・世界観」への知的発展において基本的になされることは以上の通りなのであるが，しかし，そこにおいては補足的になされることもあるとされていたので，以下，それも見ておくことにしよう[38]．

33） A, Kremer-Marietti, Le concept de science positive, Paris, Klincksieck, 1983, p.128.「形而上学的精神」の時期というのは，実は,「知的秩序」と「知的進歩」という二要件を同時に満たしうるような「真に適正な精神」が欠如している時期――その「空位期」――に他ならなかったのであった．

34） Comte, Appendice, Œuvres, tome 10, p.55.

35） コントによれば,「実証的な社会哲学」は,「実証的な自然哲学」――特に「実証的な生物哲学」――を，その基礎とするものだったのであった．Cf. Comte, Cours, Œuvres, tome 4, p.373.

36） Comte, Traité, Œuvres, tome 11, p.22.

37） Cf. ibid., pp.42-43.

38） Cf. ibid., p.38.

さて，そのような補足的な過程にあっては，既成の「一神教的理論・世界観」の下で，観察がかなり発達すると，その結果，「あれこれの種類の事物はあれこれの法則によって統治されている」という「実証的諸理論」が相当に発達し，そして更にその基礎上で，言わば「先取り」的に，「万物は不変の諸法則によって統治されている」という「実証的世界観」も，次第に強く主張されるようになったのであった[39]．だが，かかる主張は，「万物は，唯一神の可変的な意志によって統治されている」という，既成の「一神教的世界観」の主張と相容れないものに他ならない．ところで，この過程は同時に「形而上学的精神」が発達していく過程でもあって，かかる「形而上学的精神」は，益々非両立性・矛盾を深めていた以上の二つの主張の両立・「和解（transaction）」[40] を試みたのであった．即ち，それによれば，「唯一神」が「初めに不変の諸法則を創造した」のであるが，しかし「それを変更することを直ちに自己に禁じて」，「諸法則がどのように特殊的かつ継続的に適用されるかを，本性的自然に委託した（confier à la Nature）」[41] のであった．したがって，万物は，簡単に言えば，「究極的には神によって統治されている」とはいえ，「直接的には諸法則によって統治されている」のであって，先の二つの主張は今や矛盾するものではなく，両立するものとなったのであった[42]．

さて，かかる「和解的な」哲学は，「万物は」，「究極的には神によって統治されている」とはいえ，「直接的には諸法則によって統治されている」とするものであるから，観察と「実証的諸理論」の更なる大発達をもたらしたのであった．以上が，補足的な過程の要点である．

なお，コントによれば，このような知的発展というのは――更に，それをも含む，人々の諸発展・諸進歩の全体というのは――，人間集団が，どんな自然環境のうちに置かれていても行いえたようなこと・行ったことではなく，かかる発展をなすのに好都合であるような一定の自然環境のうちに置かれてだけ行いえたことであって，しかもその場合には，どの人間集団においても，遅速の違いはあれ，同じように不可避的に生じ，進行して行ったものに他ならかったのであった[43]．具体的に言えば，コントはかかる「発展」というのは，地球が「天変地異」を繰り返した後で，「正常な状態」に到達して，人間達の知的生活等につき，

39） 以前は，「神学的精神」が「基本的秩序全体の考察を独占していて」，「実証的精神は二次的な部分だけを研究」していたから，両者の「直接的な衝突が起きることはなかった．」だが，「実証的精神」はやがて「基本的秩序全体の考察」をも行うようになったのであった．Cf. Comte, Cours, Œuvres, tome 4, p.557.

40） Comte, Traité, Œuvres, tome 11, p.38.

41） Comte, Cours, Œuvres, tome 6, p.237.

42） 言い換えれば，世界は「普遍的な摂理と，この摂理自体が自己に課した特殊的諸法則とが組み合わさったものだ」（Comte, Cours, Œuvres, tome 4, p.559）ということになったのであった．とはいえ，世界の「究極的統治者」は「唯一神」であるが，その「直接的な統治者」は「実証的諸法則」だという，このような「和解的な」哲学は，「唯一神」から世界の直接的な支配力を奪ってしまうものだったから，それは，「唯一神」の何ほどかの直接的な助力や命令――「唯一神」の「力」や「権威」――を必要としていた人々にとっては，到底受け入れることのできない教義だったのであった．そして，そのような人々は，この知的発展段階においては，依然として多数存在していたのであった．したがって，この解決は，実際には，問題の知的側面に偏った解決だけで満足するような，一部の知識人達によって受け入れられるものにとどまったのであった．Cf. Comte, Traité, Œuvres, tome 11, p.38.

43） 但し，人間諸集団間で発展の速度に違いがあるために，発展の進んだ集団とそれが遅れた集団とが出会うと，かかる発展のコースは大幅に修正・変形されることになるのであった．Cf. Comte, Catéchisme Positiviste, in: Œuvres d'Auguste Comte, tome 11, p.325.

いわば「その適切な発育条件」が成立したが故に，初めて生じ進行しえたことであって，しかもその条件下では不可避的に生じ進行して行くことだ，と考えていたのであった[44]．

ところで，われわれは，コントによって「法則」として提示されていた以上のごとき「人類の知的発展」なるものから，その総過程に関わるものとして，以下のごとき二つの「知的発展」を摘出することができるであろう．

即ち，われわれはそこから，一つには，最も簡単に言えば，「知において基本をなすもの」たる「観察」が，「原初実証的，フェティシズム的，多神教的，一神教的，形而上学的」という，「理論」の諸形態――そしてフェティシズム以降は，それらの「理論」に基礎を置く「哲学」の諸形態――を取っては捨てながら成長していって，最後に「究極形態」たる「高度に発達した実証的諸理論」――そしてそれに基礎を置く「実証哲学」――を取るに至るという，「知的発展」を摘出することができるのである．なお，「観察」というのは，ここにおいては，不可避的不可抗力的に発達していくものなのであった．

ところで，この「知的発展」にあっては，より詳しく見てみれば，第一に，一定の形態の「理論」・「哲学」というのは，一定の発達段階の「観察」が存在していれば，それに対応して，不可避的不可抗力的に存在するに至るものなのであった．そして，コントによれば，「観察」それ自身は，「順次蓄積されて行く」という仕方で発達するものであり，また，そのような仕方でしか発達しえないものだったのであった．言い換えれば，それは，「非連続的な」飛躍的発達といったことは，なしえないものに他ならなかった．かくして，「観察」の発達に対応して成立する，先のごとき順序の「理論」・「哲学」の諸形態というものも，以上の事柄の結果として，人が，それらを「その順で」採用していかねばならないものだったのであって，人がそのどれかを「飛び越して（franchir）進む」[45] などというのは不可能なことだったのであった．

更に第二に，この「知的発展」にあっては，どの形態の「理論」・「哲学」も，「究極形態」たるそれを除けば，先ずもって，「観察」の成長にとって好都合なものであって，それがその成長を促すものであるが故にこそ成立していたのであったが，その下で「観察」が一定程度成長すると，その結果それは，「観察」のそれ以上の成長にとって却って不都合なものとなってしまったのであった[46]．それ故にそれは，かかる成長にとって好都合な，新たな形態の「理論」――そして，それに基礎を置く新たな形態の「哲学」――と取り替えられることになったのであった[47]．

しかも第三に，次々に登場してくる新たな形態の「理論」・「哲学」というのは，外部から導入されたようなものではなく，あくまでもかかる知的発展そのものの「内部で準備され，形成された」もの・「内部発生的なもの」に他ならなかったのであった．

そして最後に第四に，この「知的発展」にあっては，究極形態・最終段階である「高度に発達した実証的諸理論」の直前の形態・段階たる「形而

44） Cf. Comte, Cours, Œuvres, tome 4, pp.399-400.

45） Ibid., p.317.

46） 例えば「神学的哲学」――その最高段階たる「一神教」――は，最初は「知性の諸進歩を主宰し」，実証的知識の発達をもたらしていたのであったが，その結果，それは「ある時点以降は」，却って「人間精神を圧迫するもの」となってしまったのであった．Cf. ibid., pp.550-551.

47） Cf. Comte, Cours, Œuvres, tome 5, p.377.

上学的な」それというのは，「観察」と「実証的理論」の未曾有の大発展をもたらすものでありながらも，知的秩序を打ち立てることができず,「単なる知的秩序の確保」と「知的アナーキーに行き着くような知的成長・大成長」との「嘆かわしい悪循環」を惹き起こしてしまうものだったのであった．だが，人間知の基本をなす観察と「実証的理論」は，かかる「悪循環」を通じて，着実に成長していって，やがてその基礎上で，最後には,「知的秩序を確保しながら，知的進歩を実現」しうるような形態――これらの二要件を同時に満たしうるような形態――，即ち「高度に発達した実証的諸理論」とそれに基礎を置く「実証哲学」が，樹立されたのであった[48]．

さて，われわれは，コントが提示していた以上のごとき「知的発展」から，容易に，次のような仕方でなされる「事物の発展」を抽象することできるであろう．即ち，そのような「発展」にあっては，丁度ある種の動物が「脱皮」を繰り返しながら「連続的に」成長を遂げて行って，やがて「最終脱皮」を行って,「究極形態」に到達するように，事物の「基本をなすもの」が，その形態を次から次へと取りかえながら,「連続的に」成長して行って，最後に「究極形態」を取るに至るのである．なお，かかる成長それ自身は不可避的不可抗力的になされるものなのであり，また，どの形態・どの段階も，「基本をなすもの」の一定の発展段階に対応したものとして，不可避的に到来するものなのである．更に，どの形態・どの段階も，その「基本をなすもの」の成長が「連続的なもの」であることの結果として，「飛び越す」などということはできないものなのである．また，どの形態も，「究極形態」を除けば，一先ずかかる「基本をなすもの」の成長にとって好都合なものとして成立していながら，そのような成長を通じて，そのそれ以上の成長にとって不都合・不適合なものとなってしまうが故に，新たな形態に取って替わられるものなのである．更に，次々に登場してくる新たな形態というのは，外部から導入されるようなものではなく，あくまでも当該事物の「内部で準備され形成されるもの」に他ならないのである[49]．そして最後に，ここでは事物は，「最終形態」樹立の直前の段階にあっては，「存立を確保しつつ，成長･大成長を遂げる」ことができず,「単なる存立確保」と「存立不可能に行き着くような成長・大成長」との「悪循環」に陥ってしまうものだったのであるが，事物の「基本をなすもの」は，このような「悪循環」を通じて着実に成長していって，やがて事物は，そのような成長を基礎として，そこでは「存立が確保されつつ，成長がなされるような」新たな形態・「最終形態」を取るに至るのである．

われわれはコントが提示していた「人類の知的

48） なお，コントは，かかる「実証哲学」等をもって，人類の知の「究極形態」と捉えていたとはいえ，それを絶対的な意味で「究極的なもの」・不滅なものと捉えていたわけではなかった．かれが，人類という「集合的有機体も，個人的有機体と同じく，自然な不可避的な没落に必ずしたがう」，しかし「老年期の準備をすることは，幼年期を抜け出したばかりの人々の課題ではない」（Comte, Cours, Œuvres, tome 6, pp.798-800）と述べていたことに注意すべきであろう．

49） この過程は，一面では，子供が衣服をより大きなサイズのものに取り替えながら成長して行くことや，ヤドカリがより大きな巻貝の空き殻に引っ越すのを繰り返しながら成長して行くことに似た過程である．だが，他面では，それらと異なったものであった．即ち，その諸形態というのは，子供の衣服の場合のように，大人が作ったものであったり，あるいはヤドカリの場合のように，他種の動物が作ったものなのではなくて，事物が自らの手で形成したもの・「内部発生的なもの」だったのである．

生活の史的発展」なるものから，その総過程に関わるものとして，一つには，以上のごとき仕方でなされる「事物の発展」を抽象することができるのである．

更にまた，われわれはコントが提示していた「人類の知的発展」の総過程なるものから，もう一つには，次のような「知的発展」を摘出することができるであろう．即ち，人類の知的発展過程というのは，諸事象の観察」が次第に発達してきた過程であった．そして最初に成立した十分な観察によって裏づけられた「理論」というのは，あれこれの行動はあれこれの意欲によって惹き起こされているという，人間行動に関する「実証的諸理論」であり,「実証的諸法則」だったのであった．ところで，人間達はその後，その「原初の傾向」にしたがって，これらの諸法則を「外界」の諸現象に「移し替えてみた」のであった．言い換えれば，かれらは,「外界」のあれこれの現象はあれこれの意欲によって惹き起こされているという諸理論をつくりあげたのであった．かくして，原初的な「観察に基づく」「実証的諸理論」から，その「自然な」拡張適用の結果,「基本的に想像に立脚する」「神学的諸理論」――つまり，その「反対物」――が生みだされたのであった．そして，かかる理論――及びその「修正物」たる「形而上学的理論」――の下で,「観察」は更なる成長・大成長を遂げて行ったのであった．だが，このような「観察」の成長・大成長は，畢竟「実証的諸理論」の大発達を帰結するものに他ならず，かくして最後には,「神学的諸理論」及び「形而上学的理論」は退場して,「高度に発展した実証諸理論」が登場することになったのであった．われわれは，コントによって提示されていた「人類の知的発展」なるものから，その総過程に関わるものとして，以上のごとき「知的発展」も摘出することができるのである[50]．

なお，かれによれば,「神学的理論」というのは，人々が「外界の諸事象」をも何ほどか周到に観察せんとし始めた時に，かかる観察の発達段階に対応したものとして,「不可避的に」成立したものだったのであった．また，それは,「観察」の大きな発展が，その下でだけなされえたものとして[51],「高度に発展した実証諸理論」が打ち立てられるうえで「不可欠な役割を果たしたもの」に他ならなかったのであった[52]．

さて，われわれは，コントによって提示された以上のごとき「知的発展」から容易に，次のような仕方でなされる――先に見たものとは「異なった仕方」でなされる，だから「他のある仕方」でなされる――「事物の発展」を抽象することでき

50）かくして，われわれは，コントによって捉えられた「人類の知的発展」の総過程というのは，極めて大掴みには,「原初実証的→神学的（更には形而上学的）→高度実証的」という「三段階」からなるものだった，とも言いうるのである．但し，コント自身は，主要には，人々は「神学的→形而上学的→実証的」という「三段階の発展」を遂げると主張していたのであったが．Cf. Comte, Traité, Œuvres, tome 11, p.2.

51）人々が「外界の諸事象」をも何ほどか周到に観察せんとし始めた時には，それについての周到な観察に基づく「実証諸理論」などというものは，勿論未だ成立していないし，また，成立しうるものでもなかったのである．かくして，その時に成立しえたのは，それについての「神学的理論」だったのであり，そして，それだけだったのであった．

52）「神学的哲学」は,「人々の知的な発達において，不可欠な役割を果たす」（Comte, Cours, Œuvres, tome 4, p.533）ものだったのである．なお，コントは,「新しい政治哲学は，nécessaireと言う語の二つの哲学的語義――即ち,「必要」と「必然」という二義（引用者）――を互いに接近させることにより，少なくとも大きな重要性を持つ全ての社会的在り方にかかわる事柄については，初めに不可欠として表れるものを不可避として表し，逆に不可避として表れるものを不可欠として表すに至るであろう」（Ibid., p.394: cf. Comte, Système, Œuvres, tome 9, pp.28-31）と述べていた．

るであろう．即ち，事物はそこでは，「未発達な」「あるもの」・それに対応した「未発達な」「ある形態」→その「反対の形態」の成立と発達・その下での「あるもの」の大きな発達→「高度に発達した」「あるもの」・それに対応した「高度に発達した」「ある形態」というように特徴づけうるような，三段階の「発展」を遂げるのである．そして，ここにおける中間の「反対の形態」というのは，「不可避的に到来するもの」であるばかりか，当該事物が，最初の「未発達な」「ある形態」のものから，最後の「高度に発達した」「ある形態」のものへ発展するうえで，「不可欠なもの」に他ならなかったのである．さて，われわれはコントが提示していた「人類の知的生活の史的発展」なるものから，その総過程に関わるものとして，もう一つには，以上のごとき仕方でなされる――「他のある仕方でなされる」――「事物の発展」を抽象することができるのである．

そして，筆者が小論の冒頭で「事物のある独特な仕方でなされる発展」と言っていたのは，以上に見た「相異なる二つの仕方の発展」の総合たるような「発展」のことに他ならなかったのであった．即ち，そこでは簡単に言えば，一面では，事物――その基本をなすもの――が，その形態を次から次へと取り替えながら成長して行って，やがて最後には，そこにおいては「存立」が確保されつつ,「成長」が遂げられていくような「究極形態」に到達するという仕方の変化をしているのであり，また他面では，事物が，「未発達な」「あるもの」・それに対応した「未発達な」「ある形態」→その「反対の形態」の成立と発達･その下での「あるもの」の大きな発達→「高度に発達した」「あるもの」・それに対応した「高度に発達した」「ある形態」という仕方の変化をしているのであって，筆者が「事物のある独特な仕方でなされる発展」と言っていたのは，かかる両面の総合たるような事物の「発展」のことに他ならなかったのであった．そして，われわれは今，コントによって提示された「人類の知的発展」の総過程なるものにおいて，実際にかかる「発展」を見出したのである．

なお，コントの知的発展論のなかでは，「一神教的世界観」から「究極的な」「実証的世界観」への発展の「補足的な過程」と位置づけられていたとはいえ，次のごとき若干興味深い「知的発展」も提示されていた．即ち，そのような過程にあっては，既成の「一神教的世界観」の下で，「観察」とそれに対応した「実証的諸理論」が次第に成長して行って，やがてその基礎上で，「万物は不変な諸法則によって統治されている」という主張もなされるようになったのであった．だが，この主張は，「万物は，可変的な神の意志によって統治されている」という，既存の「一神教的世界観」の主張と相容れないものに他ならない．ところで，この過程は同時に「形而上学的精神」が発達して行く過程でもあって，そしてそれは，益々非両立性・矛盾を深めていた，かかる二つの「世界観」の両立――それらのある種の「和解」――を実現したのであった．即ち，それによれば，簡単に言えば，万物は「究極的には神によって統治されている」とはいえ，「直接的には諸法則によって統治されている」のであった．そして，かかる「和解的な世界観」の下で，「観察」と「実証的諸理論」は一層の成長を遂げて行ったのであった．

さて，以上の過程を抽象的に見るならば，当該事物というのは，既に高度に発達した「あるもの」であって，かつ，その「反対物」たるもの――但し，当初は未発達な状態にあって，次第に発達を遂げていって，やがては高度に発達した状態に到達するし，またそうならねばならないような「反対物」たるもの――なのである[53]．しかしながら，

このように「反対物」が次第に発達していく過程というのは，当該事物にあって「あるもの」及び「反対物」と直接に関連している「ある性質」が，当初は未だ「二重化」されていない「単一的なもの」でしかないために，両者が益々非両立となって行く過程――したがって益々崩壊という事態に近づいて行く過程――に他ならなかったのであった．しかし，かかる「矛盾激化」の過程において，当該事物においてこれまで「単一的であった」「ある性質」のある種の「二重化」をもたらしうるものが「自然に」形成されて行って，実際にそのような「二重化」がなされて，「あるもの」と「その反対物」とがそのそれぞれに割り当てられるに至ったのであった．そして，当該事物はこれとともに，それら両対立物がそこにおいて，いかなる非両立・相互排斥に陥ることもなく，共存しているものとなって，「反対物」は，もはや何の障害も無く，より高度に発達した状態に向かって進んで行くものとなったのであった．さて，この「矛盾の解消」というのは，矛盾を構成する対立項のうちの一項を廃止してなされるようなそれではなく，一者でしかなかったものを二者化して，対立する二項をそれらに割り当てるというやり方でなしとげられるそれ――「矛盾」の言わば「対立項保存的な解決」――だったのであった．われわれは，先のごとき知的発展から，以上のごとき仕方でなされる「事物の発展」を抽象することができるのである．

ところで，われわれは，かかる仕方の「発展」を，後で見るように，マルクスの「人類発展史」の総過程論のなかの一部分においても見出すのである．但し，かかる「発展」というものが「人類発展史」の総過程中のどの局面において成立しているものなのかという点に関しては，コントの見解とマルクスのそれとの間に大きな違いがあるので，筆者は，このような「発展」を，かれらにおいて共通に見出される「ある独特な仕方でなされる発展」のなかには含めなかったのであった．とはいえ，それは両者のどちらにおいても見出される若干興味深い仕方の「事物の発展」なので，筆者は，今敢えてそれに追加的に言及したし，また，次にマルクスの発展論を見る時にも，そうするであろう．

第二節　「人類の史的発展」に関するマルクスの見解

われわれは，次に，マルクスが「人類の合法則的な史的発展」の総過程だとして提示していた変動をとりあげて，そこにおいても筆者が「事物のある独特な仕方でなされる発展」と呼んでいるような変動が見出されることを，確認してみることにしよう．ところで，マルクスにあっては，諸側面からなる人類発展の全体にあって，「物質的な生活の発展史」こそ，「精神的生活の歴史」を「支配する」等して，かかる全体において最も重要な位置を占めてきたものに他ならなかったし[54]，われわれもそこにおいて，かかる「ある独特な仕方でなされる発展」を極めて明瞭に見出すことができるのである．そこで，われわれは以下，もっぱらかれの「人類の物質的発展」の総過程についての議論を見て，それからそのような「発展」を抽出してみることにしよう．

さて，マルクスによれば[55]，極めて古い時代においては，人は皆，局地的な「血縁的な共同体」に属していた．そして，かかる共同体が「大地」

53）なお，ここでは，事物が，未発達な「あるもの」であって，かつ，未発達な「その反対物」であるという状態から出発して，それらを共に次第に発達させて行く，とされても良い．その場合にも，「あるもの」と「その反対物」との「矛盾」が，全く同じように「激化して行く」のである．

――即ち，当時にあっては，「消費手段」のみならず，「労働手段や労働材料」をも直接に「提供していた」もの[56]――を所有していて，人々は，かかる基礎上で，「共同的に生産」して，その産物を――「再生産のために取っておかれる部分は除いて」――「消費の必要に応じて」受け取っていたのであった[57]．ところで，かかる「共同的な生産」というのは，当時における「生産諸力」の低さに対応した，「孤立した個人の弱さの結果」たるものに他ならなかった[58]．このようなものが，極めて古い時代における「生産諸関係」だったのである．

ところで，「血縁的な共同体」は，やがて局地的な「地縁的な共同体」へと変化した．そして，かかる「共同体」にあっては，今や「家屋とその付属物たる菜園」とが「私有」されるに至った．また，最も重要な生産手段である「耕地」は依然として「共有」のままであったとはいえ，それは成員の間で「定期的に割りかえられる」ものとなって，各人は「自分に割り当てられた耕地を自分自身の計算で耕作して，その成果を個人的に占有する」に至った．かかる「私的所有」や「個人的占有」の成立は，「生産諸力」発達に対応した「個人の能力」増大の結果たるものであったが，逆に，個人の改革意欲等を刺激して，「生産諸力」の一層の発達をもたらすものでもあった．なお，かかる「地縁的諸共同体」は，たとえ近隣のものどうしは接触しあうことがあるとしても，大きく見れば相互に無関係で没交渉なもの・「孤立的な」ものであって，そのようなものとしては，常に「専

54） かれによれば，第一に，「物質的な生活」は，「精神的な生活」等の支援なしにも――その意味で「自力」でも――相当大幅の発展を遂げうるし，実際に遂げてきたものだったのであるが，しかし，それにとどまらず，「精神的な生活」を，自己に適合的で自己の発展を支援するようなものたらしめつつ，その発展を完遂してきたものだったのであった．だから，それは，言い換えれば，歴史において他の側面を「支配的してきた」側面だったのであって，かれにあっては「精神的生活」等は，基本的には，「物質的な生活」に従属した変化を遂げてきたものだったのであった．Vgl. F. Engels, Brief an J. Bloch, 21. Sept. 1890, in: Marx/Engels Werke, Dietz Verlag, Berlin［以下MEWと略記］, Bd. 37, S.463f.

また第二に，特に，それぞれの時代における「社会の経済的な組み立て」・「経済的な社会構成」に注目してみれば，マルクスによれば，これまでの歴史にあっては，それらは総じて，何らかの「共同の意志」に基づいて，意識的につくりだされたものではなかった．したがって，それらは当然，「法律的，政治的，宗教的，芸術的あるいは哲学的」等の共同の観念に基づいて形成されたものでもなかったのである．もっとも，それらは，そのようなものと「顚倒的に」意識されてきたのであったが．それらの「社会の経済的な組み立て」は，真実には，そのような観念に先行して，「自然発生的に」成立して，その後で，意識されてきたものに他ならなかったのであった．Vgl. K. Marx, Ökonomische Manuskripte und Schriften 1858-1861, in Marx/Engels Gesamtausgabe, Dietz Verlag, Berlin〔以下MEGAと略記〕, Ⅱ/2, 1980, S. 100; F. Engels, Brief an W. Borgius, 25. Januar 1894, MEW, Bd. 39, S.206.

なおコントによれば，特定の形態の「世俗的な社会組織」というのは，それと「親縁的な」特定の形態の共同の「世界観」・「哲学」によって支援されてだけ――それによる「是認（consécration）」等の「基礎づけ」をえてだけ（Cf. Comte, Cours, Œuvres, tome 4, p.580）――，「相当に安定的で」「相当な発達」を遂げたものとなってきたのであった．だから，人々によって共有されている「物質的生活の仕方」というのは，基本的には，共有されている「哲学」が「適用された結果（application）」・意識的産物たるものに他ならなかったのであった．Cf. Comte, Appendice, Œuvres, tome 10, p.68.

55） 但し「晩年のマルクスによれば」ということである．Cf. K. Marx, Brouillons de la Réponse de Marx à Vera Zassoulitch, in: Karl Marx, Œuvres, Éditions Gallimard［以下Marx, Brouillons, Œuvresと略記］, Économie Ⅱ, 1968, pp.1558-1573. これは，かれが死の前前年の1881年に書いた草稿である．

56） Vgl. Marx, Ökonomische Manuskripte 1857/58, MEGA, Ⅱ/1. 1976, S.380.

57） Cf. Marx, Brouillons, Œuvres, Économie Ⅱ, p.1563.

58） Ibid., p.1564.

制的中央権力をそれらの上に出現させてきた」ものに他ならなかった．これらの諸共同体は，かかる隷属・被搾取の関係から自由なものではなかったのである[59]．

さて，このようにして「個人的生産」の産物を「個人的私的に占有する」ようになった「地縁的共同体」の成員達は，やがてかれらが所持する物の一部――「かれら自身が消費する必要のある分を超えた分」――を，近隣の他の「地縁的共同体」の成員達が所持するそれと私的に交換し始めた．ところで，このようにして「物がひとたび対外的な共同生活で商品になれば，それは反作用的に内部的な共同生活でも商品になる．」[60] 即ち，物品の私的交換は，やがて，同じ共同体に属する人達の間でもなされるようになって行ったのであった．ところで，かかる私的商品交換は，「共同体に対して解体的な作用」[61] を及ぼさずにはおかないものであった．

さて，このような物品交換――「ある特殊な使用価値たる物と他の特殊な使用価値たる物との交換」――は，初めは偶発的になされているものに過ぎなかったが，次第に規則的なものとなっていった．そしてそれとともに，かかる物品交換はますます「その生産に費やされた労働時間が等しい物どうしの交換」・「等価交換」という性格を帯びたものとなって行った．そして，交換に入ってくる物品の種類と量が益々増加して行くとともに，諸物品が「価値として単一共通に現れあう」[62] という必要も益々増大して行ったのであった．また，交換と社会的分業が発展するにつれて，各人の「欲求が益々多面化する」とともに，その「労働は益々一面化して行った」から，諸物品がそれと「同じ大きさの価値」のものでさえあれば，他のどんな物品とも無限定的に置き換わりえて，実際に置き換わっているという必要も，ますます増大して行ったのであった[63]．だがこれは，「ある特殊な使用価値たる物が他の特殊な使用価値たる物」と限定的に交換されるということと相容れないものに他ならなかった．かくして，商品交換の発達過程というのは，かかる「矛盾」――その存在不可能性――が発達・激化して行く過程でもあった[64]．ところで，交換に入ってくる物品の種類が増加して行くとともに，特に，交換諸欲求が「すれ違っている」ために――例えば，ＡはＢの物を欲しているが，ＢはＣの物を欲していて，そしてＣがＡの物を欲しているために――交換が成り立たないといった場合も増えていった．そこで物品交換者達は，かれらの欲する特殊な使用価値を有する物品を少しでも確実に入手せんとして，自分が有する物品を，一旦，相当に「一般的な」「使用価値」を有するような「同価値の」他者の有する物品と交換し，しかる後に，それを，かれらの好む特殊な使用価値を有する「同価値の」物品と交換するという，二段階からなる交換行動をし始めたのであった．特に各人は，かれらの生産物を，他者の有する相当に「一般的な」「使用価値」を有する諸物品のなかでも「最高度に」そうであって，再び他の生産物と交換されることが「最も」確実だと思われる物品と，一旦交換す

59） Cf. ibid., pp.1563-1567.
60） Vgl. Marx, Das Kapital, MEGA, Ⅱ/6, 1987, S.116.
61） Marx, Ökonomische Manuskripte und Schriften 1858-1861, MEGA, Ⅱ/2, S.129.
62） Vgl. Marx, Das Kapital, MEGA, Ⅱ/5, 1983, S.37.
63） Vgl. Marx, Das Kapital, MEGA, Ⅱ/6, S.115.
64） Vgl. Marx, Ökonomische Manuskripte und Schriften 1858-1861, MEGA, Ⅱ/2, 1980, S.129.ここでは事物というのは，ある程度以下の「矛盾」には堪えうるが，それを超えるような「矛盾」は堪えることができなくて，崩壊してしまうものと捉えられているのである．

るようになったから，これらの「中間媒介物」たる諸物品は，人々の「共同の意志無しに」，自ずとその数を減らして行ったのであった．そして，最後には，先に述べたような「価値として単一共通に現れあう」という，交換諸物品の「価値表現」上の「必要」にも迫られて，ただ一つとなったのであった．かくして諸商品は今や，それと「同じ大きさの価値」のものでさえあれば，他のどんな商品とも置き換わりえて，そして実際にそのように置き換わっているような，そしてまた，諸商品がその現物形態でもって，その「価値」を「単一共通に」表現しているような「特定の一商品」・「貨幣」と，「特殊な諸使用価値」として交換されているような「普通の諸商品」とに，「二重化（Verdopplung, dédoublement）」されるに至ったのであった[65]．そして，「普通の商品」の生産者達は，今やかれらの生産物を，皆同じように，先ず，それと「同価値」の「貨幣」と交換し，しかる後に，かれらが取得したこの「貨幣」を，かれらにとって直接に「特殊な使用価値」たるような他人の諸生産物と交換するという，二段階からなる交換――即ち，「売って買う」というそれ――を行うようになったのであった．このようにして「矛盾」は「対立項保存的に解決され」，また先のごとき必要は充足されることになったのである．さて，かかる「流通媒介」にして「価値尺度」たる「貨幣」の成立は，商品交換の大発展をもたらすものに他ならなかった[66]．

ところで，先に述べたように，「生産諸力」は，「耕地の共有」の上に立つ「地縁的な共同体」のなかで，一層の発達を遂げて行ったのであったが，それはやがて「耕地の何ほどかの私的所有」を要求するに至った．そして実際に，「耕地の共有」の上に立つ「共同体」にかわって，そこでは「耕地が何ほどか私有されているような」新たな「共同体」が出現したのであった．なお，かかる交代は，先に見たような共同体内外における私的な商品交換の発達によって，促進されたものでもあった．

さて，かかる新たな「共同体」の第一のものは，そこでは耕地の「所有が，国家所有と私的所有という二重の形態であい並んで」存在しているようなそれであった[67]．更に，そのような「共同体」の第二のものは，そこでは，耕地が今やことごとく私的に所有されるに至っていて，牧草地や森林などの「共同所有」が，かかる「個人的所有の補充として」存在しているようなそれであった[68]．なお，かかる諸共同体にあっては，「奴隷」や「農奴」という形態での「動産的富」の私的な「蓄積」も推し進められた．

ところで，かかる第二の「共同体」の下で一層成長していった生産諸力は，やがてそこにおける「所有諸関係」――即ち，牧草地などの「共同所有」がなお存在していて，かかる所有によって制限されているような「私有」――をも，その「桎梏」と感じ始めたのであった．即ち，それは純然たる「私的所有」――そして「自由で平等な私的所有者相互の関係」[69]――の確立を求めはじめたのであった．そして，当時勃興しつつあった「ブルジョアジー」は，賃金労働者等をも「運動に引き入れつつ」，実際にそれが全面的に実現された社

65） Vgl. Marx, Das Kapital, MEGA, Ⅱ/6, S.121. Cf. do., Le Capital, MEGA, Ⅱ/7, 1989, p.66.

66） とはいえ，人々は，この物質的発展段階では，未だ全生産物のなかのわずかな部分を私的に交換しているにすぎなかったのであるが．Vgl. ibid., S.185.

67） Vgl. Marx, Ökonomische Manuskripte 1857/58, MEGA, Ⅱ/1. S.381.

68） Vgl. ibid., S.383f.

69） Vgl. ibid., S.382.

会･「ブルジョア社会」をつくりだしたのであった．そして，かかる「ブルジョアジー」――即ち，賃金労働者を雇い入れて，営利活動を行っている「近代的資本家達」――は，生産諸力と社会的生産の未曾有の大成長をもたらした．即ち，かれらは，先ず「ギルド的な手工業」にかえて,「マニュファクチュア」をつくりだし，更にそれにかえて，機械に立脚する「近代的大工業」をつくりだしたのであった．これは「労働生産性」を著しく上昇させるものであった．そして，これによって製品は安価なものとなり，また大量に生産されるものとなって，製品の販路は大幅に拡げられたのであった．かくして，益々大規模で広範囲の商品交換がなされるようになり，それはやがては，交通手段の改革とも結びついて，地球的な規模のそれとなった．即ち,「世界市場」に立脚する地球的な規模の交易・人類的な規模の社会的分業がなされるに至ったのであった[70]．

しかしながら，大成長を遂げていた「資本主義的な商品生産」は，やがて，生産された諸商品が殆ど売れず，そのため，大量の労働者が解雇されたり，大量の生産諸力が破壊されたりして，社会的生産が大縮小するという事態，即ち,「恐慌」という事態に陥ってしまったのであった．そして，その後は「沈滞（stagnation）」[71] が続いた．とはいえ,「資本主義的な商品生産」は，やがて再び成長し始め，そして更には大成長をし始めた．だが，その行き着く先は再び「恐慌」であり，社会的生産の大縮小であった．大発展を遂げた「資本主義的な商品生産」というのは，かかる二事――「恐慌に行き着くような成長・大成長」と「沈滞」――を交互に繰り返すものに他ならなかったのであった．しかも，そのような繰り返しを通じて，市場と生産がより発達したものとなって行くが故に，それは，かかる「恐慌」と大量の生産諸力の破壊等の事象を，ますますより大きくなる規模で，繰り返し生じさせるものだったのであった[72]．

ところで,「資本主義的な商品生産」というのは，生産された諸商品が「貨幣への転化」に成功すること・それらが売れることを，その存立条件とするものである．だから,「資本主義的な商品生産」が先のごとき二事を交互に繰り返したというのは，言い換えれば，それが「存立条件の大幅な不充足に行き着くような成長・大成長」[73] と「ただの存立（成長なしの存立）」とを交互に繰り返した，ということに他ならなかったのであった．

さて，マルクスによれば,「資本」が，このように,「恐慌」と大量の生産諸力の破壊等を繰り返し生じさせるとともに，しかもそれらをより大きくなる規模で繰り返し生じさせるとともに,「資本に対して『去って，社会的生産のより高い段階に席を譲れ』という忠告が与えられる」ことになったのであった[74]．即ち，かかる事態は，マルクス

70） Vgl. Marx/Engels, Mnifest der Kommunistischen Partei, MEW, Bd.4, S.463f.

71） Marx, Le Capital, MEGA, Ⅱ/7, p.556.

72） なお，マルクスによれば,「資本主義的生産」というのは,「労働生産性の大きな上昇を伴うような資本蓄積」を旺盛に行うことによって,「相対的過剰人口」･「産業予備軍」をつくりだして，その基礎上で，膨張・収縮運動を繰り返すものに他ならなかった．そして，本文で見た「沈滞」→「成長・大成長」→「恐慌」という過程は，一旦形成された「産業予備軍」が,「部分的あるいは全面的に」「現役に復帰する」ことを通じて,「より広大な規模で再形成される」に至る過程だったのであった．Cf. ibid., p.555.

73） マルクスの表現によれば,「資本主義的商品生産」の成長・大成長にあっては,「剰余価値の生産条件とその実現条件との間の矛盾」が「増大」して行ってしまうのであった．Vgl. Marx, Ökonomische Manuskripte 1863-1867, MEGA, Ⅱ/4.2, 1992, S.313.

74） Vgl. Marx, Ökonomische Manuskripte 1857/1858, MEGA, Ⅱ/1, S.623.

によれば，人々に，今や極めて高度なものへと発展した社会的生産諸力――即ち，「生産手段の集中と労働の社会化」等――を保全し，更に一層発展させるためには，かかる悪しき事態を惹き起こしている「資本主義的な私的所有と私的生産」の諸関係を廃して，それにかえて，「生産手段の全社会的な規模での共有に基づく，全社会的な規模での共同的生産」を樹立しなければならないということを，告げ知らせるものに他ならなかったのであった[75]．

更に，マルクスによれば，かくのごとき悪循環のなかで，かかる新たな生産諸関係・所有諸関係の実現を推進する社会的勢力も形成されて，それがその力を益々強めて行ったのであった．そして，そのような社会的勢力によって，最後には，それが実際に樹立されるのであった．

即ち，マルクスによれば，「資本主義的商品生産」の発達とともに，賃金労働者達がその数を増して行ったのであった．だが，かれらの増大過程というのは，同時に，その「貧困・隷属・労働苦」の発達過程でもあり，したがってまた，かれらによるかかる状態を改善せんとする行動の発展過程でもあった．ところで，「マニュファクチュア」を経て「機械制大工業」に至る生産の発達過程は，労働者達の団結の条件をつくりだしていく過程でもあった．特に，「機械制大工業」は，労働者達の労働や生活を均等化するとともに，かれらが組織的な行動をなしうるよう訓練し，また，それがつくりだす交通手段は，異なった地域の労働者達の連携を可能にしたのであった．かくして，労働者達は実際に，その生活を改善せんとして，ますます広汎に団結するようになって，その力をますます増大させて行ったのであった．ところで，労働者達は，その団結した行動によって，特に好況期においては，その状態を多少改善することができるし，実際に改善した．とはいえ，一旦「恐慌」が勃発すれば，かれらの状態は再び悪化するどころか，極めて悲惨なものとなってしまったのであった．しかも，そのような「恐慌」は，先に見たように，ますます大規模に繰り返されたのであった．かくして，マルクスによれば，このように生活改善の試みを繰り返し挫折させられ，かつ，「資本主義的生産」の発展とともに，ますます広汎に団結するようになった労働者達は，やがて，「資本主義的生産」の下での「かれらの生活の持続的で大幅な改善の実現」という「徒な」期待・希望的観測を捨て去って，そのことを真に実現するために，生産手段の全社会的規模での共有に立脚した，全社会的規模での「計画的生産」を樹立せんとし始めたのであった．だが，資本家階級は，その物質的利害から，あくまでも「資本主義的商品生産」を維持せんとした．かくして，「資本主義的商品生産の維持か」，それとも「その廃止か」をめぐる，資本家階級と労働者階級との闘争が激化して行った．さて，マルクスによれば，激化していくかかる資本家階級と労働者階級との闘争において，後者の力がやがては前者のそれを上回るに至るのであった[76]．かくして，この闘争は，最後には，労働者階級による「資本主義的私的生産」の廃止と，かれらによる生産手段の共有を基礎とした，全社会的規模での「計画的な生産」の樹立でもって，終わるのであった[77]．なお，マルクスによれば，かかる「共同的な生産」にあっ

75） なお，「資本主義的な商品生産」の発達とともに，「資本の集中」――少数の資本家による多数の資本家の収奪――も進んで行ったのであるが，それは，マルクスによれば，かかる「生産手段の集中と労働の社会化」を大きく推し進めるものに他ならなかった．Vgl. Marx, Das Kapital, MEGA, Ⅱ/6, p.682.

76） Vgl. Marx/Engels, Mnifest der Kommunistischen Partei, MEW, Bd.4, S.473f.

ては，社会的生産は，容易にその「存立条件を確保しつつ」,「成長を遂げていく」ことができるし，実際そのような成長を遂げるのであった．

ところで，マルクスによれば，全社会的規模での「計画的生産」というのは，最初は民族単位でなされるものであるとはいえ，やがて地球的・全人類的な規模でなされるそれにまで発展するものに他ならなかった．かくして，最後には，各人が人類的規模の共同体の成員であって，それが土地等を含む生産手段を所有していて，その基礎上で人々が共同生産をしているような在り方が誕生し，発展するのであった[78]．

なお，人間諸集団における「生産の発展」というは，マルクスによれば，それらが一定の自然環境の下に置かれれば，それらにおいて「自然必然的に」生じること・それらにおいて不可避的不可抗力的に進行して行くものに他ならなかったのであった[79]．

さて，われわれは，以上に見てきたマルクスの「人類の物質的生活の発展史」なるものから，その総過程に関わるものとして，次のような二つの「物質的発展」を摘出することができるであろう．

即ち，われわれはそこから一つには，最も簡単に言えば,「生産諸力」が,「生産諸関係」の諸形態を取っては捨てながら，成長していって，最後に「究極形態」のそれを取るに至るという「物質的発展」を摘出することができるのである[80]．なお，ここで,「生産諸力」というのは，不可避的不可抗力的に成長していくものなのであった．

ところで，この物質的発展にあっては，より詳しく見れば，第一に，一定の形態の「生産諸関係」というのは，一定の発達段階の「生産諸力」が存在していれば，不可避的に存在するに至るものに他ならなかった．また，マルクスによれば,「生産諸力」それ自身は,「順次蓄積されて行く」という仕方で発達するものであったし，また，そのような仕方でしか発達しえないものだったのであった．言い換えれば，それもまた,「非連続的な」飛躍的発達といったことは，なしえないものだったのである．だから,「生産諸力」の発達に対応して成立する，先のごとき順序の「生産諸関係」の諸形態というものも，以上の事柄の結果として，人が，それらを「その順で」採用していかねばならないものだったのであって，人がそのど

77） なお，マルクスは，以上のごとき大変革において，人々の間に,「物質的生産の史的発展法則」についての「科学的な」知識が普及することは，この移行過程を何ほどか短縮させ,「生みの苦しみ」を何ほどか軽減させうると考えていたとはいえ，争いを大幅に減少させうるとは考えていなかったから，かかる大変革は，基本的には，物質的利害と物質的利害との衝突・力と力とのぶつかり合いという「激しい闘い」を通じて，達成されるものに他ならなかったのであった．Vgl. Marx, Das Kapital, MEGA, Ⅱ/5, S.14. そして，以上の事柄は，マルクスの史的発展論とコントのそれとの相違点の一つをなすものだったのであった．

78） なお，マルクスは，かかる「人類的規模の共同体」をもって，人間社会の「究極形態」と捉えていたとはいえ，コントと同じく，それを絶対的な意味で「究極的なもの」・不滅なものと捉えていたわけではなかった．エンゲルスの「人類史には，単に登り道だけでなく，降り道も存在する」,「しかしわれわれは，社会の歴史がそこから下降しはじめる転換点から，なおかなり隔たっている」（F. Engels, Ludwig Feuerbach und der Ausgang der klassischen deutschen Philosopie, MEW, Bd. 21, S.268）といった発言を参照されたい．

79） Vgl. Marx, Das Kapital, MEGA, Ⅱ/6, S.483. 但し，マルクスにあっても，人間諸集団間で発展の速度に違いがあるために，発展の進んだ集団とそれが遅れた集団とが出会うと，かかる発展のコースは大幅に修正・変形されることになるのであった．Vgl. Marx/Engels, Vorrede zur russischen Ausgabe von 1882 des Manifestes der kommunistischen Partei, Werke 4, S.576.

80） なお，マルクスはかかる「形態」のことを「包み（Hülle, enveloppe）」（Vgl. Marx, Das Kapital, MEGA, Ⅱ/6, S.682. Cf. do., Le Capital, MEGA, Ⅱ/7, S.679）とも呼んでいた．

れかを「飛び越して（überspringen）進む」[81]などというのは不可能なことに他ならなかったのであった.

更に第二に，この発展にあっては，「生産諸関係」のどの形態も,「究極形態」を除けば，一先ず，「生産諸力」の成長にとって好都合なものであって，それがその成長を促すものであるが故にこそ存立していたのであるが，その下で「生産諸力」の成長が一定程度達成されると，その結果それはそのそれ以上の成長にとって却って不都合・不適合なものとなってしまったのであって[82]，それ故に，それは脱ぎ捨てられて，それにかわって，その成長にとって適合的であるような「生産諸関係」の新たな形態が身につけられることになったのであった.

また第三に，そこにおいて次々と登場してくる「生産諸関係」の新たな形態というのは，外部から導入されるようなものではなく，あくまでもかかる物質的発展の「内部で準備され形成されたもの」だったのであった.

そして最後に第四に,「究極形態」の直前に存在している「ある特定形態の」生産諸関係というのは，社会的生産の「ただの存立（成長無しの存立）」とその「恐慌に行き着いてしまうような成長・大成長」との「悪循環」をもたらしてしまうものだったのであった．だが，生産諸力はこのような状況のなかにあっても着実に成長を遂げて行って，やがてそれを基礎として，そこでは「社会的生産」が「その存立条件を確保しつつ，成長をとげて行く」ような，新たな形態・「究極形態」の「生産諸関係」の樹立がなされたのであった.

さて，われわれは，以上のごときマルクスの「人類の物質的生活の発展史」なるものから，コントにおいて先に第一に見たのと同じ，次のような仕方でなされる「事物の発展」を，容易に抽象することができるであろう．即ち，くどいようであるが敢えてそれを繰り返せば，そこにおいては，事物――その「基本をなすもの」――は，その形態を次から次へと取り替えながら「連続的に」成長していって，やがて「単なる存立確保」と「存立不可能に行き着くような成長・大成長」の「悪循環」に陥りながらも，最後には，そこでは「存立」が確保されつつ「成長」が遂げられて行くような「究極形態」に到達する，という仕方の「発展」を遂げるのである．さて，この成長それ自身は不可避的になされるものなのであり，更に，どの形態・段階も，「基本をなすもの」の一定の発展段階に対応したものとして，不可避的に到来するものなのである．また，どの形態・段階も，その「基本をなすもの」の成長が「連続的なものである」ことの結果として，「飛び越す」などということはできないものなのである．更に，どの形態も,「究極形態」を除けば，一先ず，かかる「基本をなすもの」の成長にとって好都合なものであるが故にこそ存立しているのであるが，その下でその成長が一定程度なされると，却ってそのそれ以上の成長にとって不都合・不適合なものとなってしまうが故に，新たな形態に取ってかわられるものなのである．また，次々に登場してくる新たな形態というのは，外部から導入されるようなものではなく，あくまでも当該事物の「内部で準備され形成されるもの」に他ならないのである[83].

かくして，われわれはここでも，われわれがコントにおいて先に第一に見たのと同じ，「事物のある仕方でなされる発展」を見出したのである.

81） Vgl. Marx, Das Kapital, MEGA, Ⅱ/6, S.67.

82） マルクスの表現によれば，当該の「生産諸関係」は，「生産諸力」の「発展形態から，その桎梏へと変化する」のであった．Vgl. Marx, Ökonomische Manuskripte und Schriften 1858-1861, MEGA, Ⅱ/2, S.101.

ところで，マルクスは，「近代社会」は「最も太古的な（le plus archaïque）型の一高等形態――共同的生産と共同所有――へ復帰（retour）」[84] することになる，とも述べていた．そしてわれわれは，先に見た，マルクスが提示していた「人類の物質的発展」なるものから，その総過程に関わるものとして，もう一つには，未熟な生産諸力の上に立つ局地的な「共同的生産」→「私的生産」（更に「商品生産」特に「資本主義的商品生産」）・その下での生産諸力の大きな成長→高度な生産諸力の上に立つ人類的な規模の「共同的生産」という「三段階」からなる「物質的発展」も摘出することができるのである．なお，ここで中間段階をなす「私的生産」（更に「商品生産」特に「資本主義的商品生産」）というのは，かれによれば，第一には，「不可避的に成立したもの」――極めて古い時代の「共同体」の下で，生産諸力が若干上昇して，その結果，不可避的に成立したもの――だったのであった．そして，第二には，高度な生産諸力の上に立つ人類的な規模の「共同的生産」の到来にとって，「不可欠なもの」だったのであった．即ち，原初的な生産諸力が，その下でだけ，一層の成長・大成長を遂げえたし，実際に遂げて[85]，その基礎上で，そのような「共同的生産」が樹立されるものに他ならなかったのであった．

かくして，われわれは，マルクスが提示していた「人類の物質的発展」なるものからも，その総過程に関わるものとして，われわれが先にコントにおいて第二に見出だしたのと同じ，「未発達な」「あるもの」・それに対応した「未発達な」「ある形態」→その「反対の形態」の成立と発達・その下での「あるもの」の大きな発達→「高度に発達した」「あるもの」・それに対応した「高度に発達した」「ある形態」――なお，ここで「反対の形態」というのは，総過程の不可避的で不可欠な中間段階をなすものなのであるが――という仕方でなされる「事物の発展」を，抽象することができるのである．

それ故われわれは，今や，マルクスが提示していた「人類の物質的発展」なるものにおいても，その総過程に関わるものとして，筆者が先に「事物のある独特な仕方でなされる発展」と呼んでいた，「事物の」「ある二つの仕方の発展の総合たる

83） なおマルクスにあっては，「生産諸力」のそれ以上の成長にとって適合的であるような，新たな「生産諸関係」というのは，既存の「生産諸関係」の不適合化と相関しつつ，かかる不適合化と同時進行的に形成されていくもの――「タイムラグ無く」発生・発展して行くもの――に他ならなかった．（たとえば，「資本主義的私的生産」と「労働の社会化」の「矛盾」が激化して行く過程というのは，「労働の社会化」が益々進展して行くそれであって，かかる「矛盾の解決物」たる「高度に発展した共同生産」が，益々完全に準備されて行く過程だったのであった．）即ち，抽象的に言えば，「矛盾の激化」と「その解の準備」とは，同時的に進行して行くものだったのであった．ところで，このような場合には，マルクスによれば，「課題そのものは，その解決の物質的諸条件が既に存在しているか，または，少なくとも生まれつつある場合にだけ発生することが，常に見出される」ことになるから，「人は，自分が解決しうる課題だけを，自分に提起する」（Ibid.）と言いうるのであった．だが，コントにあっては，ある体制の不適合化――その矛盾の激化――と，それに取って代わるべき他の体制の準備との間に「時間差」がある，という場合も存在しているのであった．そして，その場合には，不適合となった「消滅すべき」「ある体制」――例えば神学的体制――が，「消滅しない」ことになるのであった．（あるいは，それが「一旦消滅」しても，その後で「復活してしまう」のであった．）コントの「ある体制は，他の体制が，既に十分に形成されて，それと直ちに置き換わる準備がなされている場合にしか，消滅しない」（Comte, Appendice, Œuvres, tome 10, p.18）という発言に注意されたい．

84） Marx, Brouillons, Œuvres, Économie Ⅱ, p.1570.

85） 言い換えれば，「原初的な生産諸力」が「原初的な共同的生産と共同所有」の下で，益々成長を遂げていって，やがて高度なものとなるというのは，全くの不可能事に他ならなかったのであった．

ような」「発展」を見出したのであり，かくして，コントとマルクスの思想の「更なる同一性」を確認したのである．

なお，われわれは，マルクスの人類の物質的発展史論のなかにおいても，われわれが先にコントの人類史論において注目しておいたのと同じ,「ある物とその反対物との矛盾の史的成長」と，一者でしかなかったものを二者化して，対立する二項をそれらに割り当てるというやり方でなしとげられる，その「対立項保存的な解決」という，若干興味深い発展を見出しうるのである．但し，それが「人類発展史」の総過程中のどの局面において成立しているものなのかという点に関しては，両者の間に大きな違いがあって，それはコントの人類の知的発展史論においては，先に見たように,「究極形態への移行の補足的過程」において見出されるものだったのであるが，マルクスの物質的発展史論においては，今見たように,「究極段階」に遥かに先立つ,「物々交換の発展過程」において見出されるものだったのであった．したがって，筆者は，先に述べたように，このような「発展」を，かれらにおいて「共通に見出される」「ある独特な仕方でなされる発展」のなかには含めなかったのであったが，それはこのように両者のどちらにおいても見出される若干興味深い仕方の「事物の発展」なので，小論の最後に，マルクスの「物々交換の発展」論をもう一度簡単に見て，そこにおいてそのような「発展」を確認しておくことにしたい．

さて，初めにおいては「ある特殊な使用価値たる物と他の特殊な使用価値たる物との交換」が偶発的になされていた．だが，それは次第に規則的なものとなっていき，そしてそれとともに，かかる物品交換はますます「等価交換」という性格を帯びたものとなって行った．そして，諸物品の交換の発展とともに，それらが「価値として単一共通に現れあう」ということが益々必要となって行き，また，物品がそれと「同じ大きさの価値」のものでさえあれば，他のどんな物品とでも無限定的に置き換わりえて，実際に置き換わっているということもまた，益々必要となって行ったのであった．だがこれは,「ある特殊な使用価値たる物品が他の特殊な使用価値たる物品」と限定的に交換されるということと相容れないこと・矛盾することに他ならない．だが諸商品はやがて，それと「同じ大きさの価値」のものでさえあれば，他のどんな物品とも置き換っていて，かつ，諸商品がその現物形態でもってその「価値」を「単一共通に」表現しているような「貨幣商品」と,「特殊な諸使用価値」として交換されているような「普通の諸商品」とに,「二重化」するに至ったのであった．このようにして,「矛盾」は解消し，また先のごとき「価値表現」上の必要は充足されたのであった．

さて，われわれは，以上の過程から,「矛盾の史的成長」とその「対立項保存的な解決」[86]という，コントにおいて見たのと全く同じ「発展」を，極めて容易に抽出することができるであろう[87]．

86） なお，マルクスは,「一者を二者化して」,「矛盾を対立項保存的に解決する」ということの一例として,「一物体が一定点に対して絶えず遠ざかっていて，同時に，それに対して絶えず近づいている」という「矛盾」が，一物体の「楕円運動」の実現によって「解決される」ことを挙げていた．即ち，一物体の絶えざる「楕円運動」にあっては，一物体は相異なる二定点からの距離の和が一定であるような軌道上を絶えず運動しているが故に，それは，例外的な時点を除けば，ある一定点に近づく運動をしている―その時それは，同時に，他の一定点から遠ざかる運動をしている―か，あるいは，それから遠ざかる運動をしている―その時それは，同時に，他の一定点に近づく運動をしている―のである．だから,「一物体」は，その「楕円運動」にあっ

ては，例外的な時点を除けば，「絶えず遠ざかる」という運動をしていて，同時に，「絶えず近づく」というそれをしているのである．但し，「同じ一定点」に対してではなく，「相異なる二定点」に対してそうしているのであって，かくして，そこでは，「矛盾」は「対立項保存的に解決されている」，と言いうるのであった．Vgl. Marx, Das Kapital, MEGA, Ⅱ/6, S.129．なお以上の論述は，そのまま，「一物体の楕円運動」を「論理展開」する方式の一つでありうるものである．

87）ところで，「あるもの」と「反対のもの」という対立物から成るとはいえ，それらが当該物の相異なる二面に割り当てられているが故に，それらがそこでは「矛盾しあってはいないような物」があって，しかもそれが，今本文で見たような，「あるものと反対のものとの矛盾の成長・激化」とその「対立項保存的な解決」という史的過程の結果，成立した物なのであれば，われわれは，かかる物を単に「発生史的に叙述する」だけでなく，それを次のように「論述･論理展開する」こともできるであろう．即ち，われわれは，先ず，そこでは，「あるもの」及び「反対のもの」に直接に関連している「ある性質」が（未だ「二重化」されていない）「単一的なもの」であるために，それらの対立物が「矛盾しあっているような物」――だから「実在不可能で架空な物」――について述べたうえで，次に，かかる性質を「二重化」して，「そのような矛盾を対立項保存的に解決しているもの」として，当該物について述べるという仕方で，それを「論述・論理展開」することもできるであろう．そしてマルクスは，その『資本論』の「商品と貨幣」篇で，商品流通の発生史を踏まえて，自覚的にかかる論理展開をしていたのであった．（かれはそこでの「論理展開」において，「交換過程は，商品がその使用価値と価値との内的対立をそこにおいて表す，外的対立を生みだす」（Ibid., S.130）と述べていた．）そしてコントも，マルクスほど明確に自覚的にそのような「論理展開」をしていたとは言えないにしても，実質的にはそうしていたと言いうるのである．即ち，かれは，「スコラ哲学の教理」の把握に際して，その発生史を踏まえて，それをもって明確に，「相容れない」「神学的原理と実証的原理」とを「和解させたもの」だと述べていたのであった（Cf. Comte, Traité, Œuvres, tome 11, p.38）．つまり，かれは，先ず，そこでは「神学的原理と実証的原理」という対立物が「矛盾しあっている事態」について述べ，次に，かかる「矛盾」を「対立項保存的に解決しているもの」として，「スコラ哲学の教理」について述べていたのであった．だからコントも，かかる事物については，それを「発生史的に叙述する」だけでなく，マルクスと根本的に同じ仕方で，その「論述・論理展開」をもしていたと言いうるのである．

しかし，以上のことは，逆に言えば，そのような発生史的過程が全く見出されないのであれば――一つでも見出されるのあれば，話は違うのであるが――，かかる事物をこのように「論述・論理展開をする」のは，その「基本的に妥当な論述の仕方」ではない，ということに他ならない．即ち，それは，何事をも思い描きうる人間の想像力の所産たるにすぎないもの――かかる事物の一つの「奇抜な」論述・解釈，但し「一応辻褄のあった」それ――とされねばならないであろう．（とはいえ，それはその「一応辻褄のあった」解釈なのだから，そのような解釈を「絶対的に」無意義・無意味なものだとしてはならないであろう．即ち，そのような「発生史的過程」というのは，もしかしたらこれから実際に見出されることであるかもしれないのである．）だからまた，「使用価値」及び「価値」としての「商品の矛盾の成長・激化」と「その貨幣形成による解決」というのは，「史実」として全く認められないことだというのであれば，即ち，それは「歴史的な事柄についての純然たる作り話」にすぎないというのであれば（Vgl. H-G. Backhaus, Materialien zur Rekonstruktion der Marxschen Wertthorie 3, Gesellschaft, 1978, S.44），先ず「商品」とその「矛盾」について述べ，次に「貨幣定立」による，その「対立項保存的な解決」について述べるという，マルクスの『資本論』における「貨幣の論理展開」というのは，根本的に変更されてしかるべきものだということになるであろう．（参照：向井公敏著『貨幣と賃労働の再定義』，ミネルヴァ書房，2010年，88ページ）但し，史実についてのそのような判断というのは，専門の経済史家諸氏だけが良くなしうることであって，筆者のごとき門外漢のなしうることではない．

（中央大学名誉教授・西洋思想史）